

CTのスペシャリスト 「X線CT認定技師」の紹介



当院画像センターでは様々な検査機器があります。X線一般撮影、マンモグラフィー、X線CT、X線TV、骨密度検査、MRI、SPECT-CTなどです。

当院では診療放射線技師（以下技師）が24名在籍しております。技師という国家資格を取得すれば、医師の指示の下、患者さんに放射線を照射することが可能となります。つまり、資格をもっていれば、誰でもある程度の放射線業務を行う事は可能なのです。

技師の中でも検査のスペシャリストは存在します。当院ではX線CTのスペシャリスト「X線CT認定技師」を課長の佐伯 広人（さいきひろと）技師が4年前に、主任の角川 泰生（すみかわやすたか）技師が3年前に取得しました。

日本X線CT認定技師は診療業務経験5年以上、X線CT臨床実務

経験3年以上の診療放射線技師免許保有者が講習会を受講し、認定試験に合格すると取得できる資格です。特定非営利活動法人日本X線CT専門技師認定機構が運営しており、日本医学放射線学会（JRS）日本放射線技術学会（JSRT）、日本診療放射線技師会（JART）を関連学会としています。

全国に4,500名を超えるCTのスペシャリストが認定され、日々のCT撮影の技術と知識の研鑽を行っています。年間2万件近いX線CTの検査をどの技師が検査しても検

査に差がでないように、被ばくの低減に努め、機器の調整設定を行ったり、難しい撮影方法などはその専門的な知識と技術を惜しみなく発揮してくれるスペシャリストです。

また、勉強会、院内カンファレンスへの積極的な参加によって、患者さんへ良質な医療を提供できるよう切磋琢磨している姿も後輩から見て憧れの姿となっています。

（放射線室 主任補 高須賀 弘喜）



日本病院学会に参加して

地域連携室 課長補佐 三谷 直紀



7月7日（木）～8日（金）、神話の国、島根において「第72回日本病院学会」が開催されました。本学会には第64回高松（2014年）での開催以降、毎年多職種でチーム編成し参加してきました。ここ最近ではコロナ禍の影響もあり、中止やオンラインでの開催となりましたが、今回2年振りの学会参加となりました。

当院からの演題は看護部より『褥瘡』『医療メデイエーション』『認知症』『早期離床リハビリテーション』をテーマに、薬剤部からは『医薬品管理・廃棄薬』そしてリハビリテーション室は『チーム活動と摂食機能療法』について、昨年の冬頃より発表の準備に取り掛かり、一般口演に6演題を提出しこれまで取り組んできたチーム活動や成果



の報告をまとめ現地での発表を予定していました。

直前になり急速なコロナ感染数の増加により参加を取りやめる決断を迫られましたが、学会との交渉を重ね、発表に関しては動画形式での発表が認められたこともあり、少数で現地へ赴きました。

本会では、『医療の持続可能性—COVID-19を超えて、未曾有の高齢化時代へ向けて—』をテーマに2日間にわたって活発な議論や意見交換が行われ、改めて、当院の立ち位置や方向性を考えさせられる機会となりました。

日本病院会相澤孝夫会長が『75歳以上の高齢者が増加し、働き世代人口が急速に減少する確かな未来が到来する我が国における病院医療の未来を考える』とした講演の中で、従来の「治

す医療」とは異なる「治し支える医療」が必要となる。また医療の中核となる地域密着型病院（仮称）を軸とした新たな入院医療システムの構築が必要であり、この病院の機能や医療圏の設定が必要である。という点に触れられていたことが印象的でした。

今後の病院ビジョンや業務における質の向上に大変役立つ多くの講演を拝聴することができ、有意義な学会参加であったと思います。

【当院からの演題】

- ・ 当院の褥瘡予防対策における今後の展望
- ・ SPDシステムを活用した医薬品管理と廃棄薬の現状
- ・ 摂食嚥下チーム活動と摂食嚥下障害に対する意識の変化について
- ・ 医療安全活動に活かす医療メデイエーション
- ・ 認知症ケアサポートチームの活動と今後の課題
- ・ 当院の早期離床・リハビリテーション加算運用における課題